

第一章 ごみは文化のバロメーター

大澤正明

1. 「ごみは文化のバロメーター」と言われた時代

「ごみは文化のバロメーターである」と言われた時代があります。しかし、いつ誰が言っていたのかと問われると困ります。たぶん、ごみがたくさん出るのはわが国の文化が進展した証であり喜ぶべきことであるという意味でしょうし、それは、高度経済成長期のただ中のことでしょう。しかし、新聞や国会議事録を調べてみましたが、どうもよく分かりません。ある時期に、流行語のように多くの人びとが口にしていたという気配もありません。かろうじて、昭和40(1965)年2月の衆議院予算委員会で、「だんだんごみの量もふえてくる。ごみというものは文化の一つのバロメーター¹です」という発言が見られます。この場合の文化というのはいったい何だろうか、文化²とごみはどのように繋がるのでしょうか。

環境白書の昭和47年度版に次のような表現があります。

¹ 私の家は3代前が鯉の網元だったので、家にはバロメーターを置いていました。父はサラリーマンだったのにもかかわらず、毎日バロメーターに目をやりながら、「海が荒れそうだ」とかなにやら独り言を呟くのが習慣でした。しかし、今やバロメーターはほぼ死語に近い。広辞苑によると、①気圧計。晴雨計。②転じて、物事の状態・程度を知るための目安となるもの。指標。

² 【文化】①文徳で民を教化すること。②世の中が開けて生活が便利になること。文明開化。③(culture)人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ科学・技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む。文明とほぼ同義に用いられることが多いが、西洋では人間の精神的な生活にかかわるものを文化と呼び、技術的発展のニュアンスが強い文明と区別する。(出典：広辞苑)

ごみの1人1日当りの排出量は生活水準のバロメーターとされており、し尿の排出量が1.0～1.5l/人/日の生理的範囲にとどまるのに対して、ごみの排出量は所得水準と正の相関があり、昭和40年度以降の平均伸び率は年5.9%を示しており、この伸び率が持続するものとして推計すると、1人1日当りの排出量は昭和44年度の870gが昭和50年度には1,200gとなる。

ごみとし尿をこんな風に比較されるとすこぶる分かり易いのですが、つまり、生活水準の向上を文化と読み替えていた時代、消費は文化と捉えていた時代だったということでしょうか。

それにしても、何故か、私たちは「文化のバロメーター」という言葉が大好きなようです。国会議事録を「文化&バロメーター」で検索すると、平成20年までで180件出てきます。ちょっと多すぎるので、「文化のバロメーター」という言葉に絞って検索すると65件です。それを一つ一つ眺めてみたのですが、なんとまあ、日本人は「文化のバロメーター」という言葉が好きなこと。いくつか挙げてみますと、

- ・電力の需用量、普及徹底の度合は文化のバロメーターと言われております(S22.10.8)
- ・出版事業の活盛衰は一國の文化のバロメーターでありまして(S23.4.13)
- ・通信事業はその國の文化のバロメーターでございますが(S23.6.9)
- ・テレビジョンこそは一國文化のバロメーター(S26.5.26)

- ・赤痢はその国の**文化のバロメーター**といわれるようなもの(S41.3.30)
- ・水の使用量の多少は**文化のバロメーター**(S43.11.30)
- ・街路あるいは下水道、公園というようなものが都市の**文化のバロメーター**を示すもの(S44.2.19)
- ・著作権法案は高度の文化的な法であり、また**文化のバロメーター**(S45.4.21)
- ・道路のよしあしはその国の社会、経済、**文化のバロメーター**で(S45.4.24)
- ・人権の保障、最低の場所に立たされている人間の人権がどこまで守られているかということが、その国の**文化のバロメーター**である(S48.7.17)
- ・紙そのものは**文化のバロメーター**で(S48.8.29)
- ・いままでがまんして食わなかった砂糖は、やはり**文化のバロメーター**ですから(S49.10.1)
- ・小鳥の数やその種類が都市の**文化のバロメーター**である(S53.5.12)
- ・創造性が尊重される時代、ソフトの時代だろうと思っておりますけれども、つまり、ソフト尊重の度合いというのが**文化のバロメーター**(S59.5.10)
- ・郵便物を差し出す通数が**文化のバロメーター**(S62.5.25)
- ・労働時間は**文化のバロメーター**であります。十八世紀のイギリスでは一日十六時間という長時間労働でありました。今日では一日八時間労働が常識となっております(H1.6.16)
- ・雇用はその国の**文化のバロメーター**(H5.11.4)
- ・その国の**文化のバロメーター**は文部省の予算とも言えるのではないかと(H6.10.23)

いちいちごもっともという感じはするのですが、本当にこのようなことが広く言われ

ていたかという疑問です。それなのに、多くの場合は「・・・とされています」という伝聞形態で表現されていますが、たぶん、業界の仲間内で「これは文化のバロメーターと言ってもいいのじゃないか」というような話題が出て、「そうだ、そうだ」ということになったのではないかとこの風景も目に浮かびます。「ごみの量と文化のバロメーター」という言葉もそのような背景で生まれていたのかもしれませんが、この件は、いずれ詳しく考えることにしましょう。

2. ごみについて考えるということ

ごみ処理について考えることはたくさんあります。たとえば、この高齢化の時代に排出者に負担を強いる多種分別方式や指定袋制、有料化というシステムが合っていることなのだろうか、あるいはレジ袋の使用を制限しながら、ごみ処理専用の指定袋を買わせているのはどうなんだろうか、さらに、日本全国どこに行っても「焼却処理」と「リサイクルプラザ」という金太郎飴のような処理形態のこの時代に、市町村によって多種多様な分別方式を採用する必要があるのだろうか。あるいはまた、本来人が出すごみは他人には見られたくないものですが、透明のビニール袋を義務づける必然性はいかかなものだろうか。

そして、ごみの種類や量について考えることも山ほどあります。

「ごみを見ると時代が分かる」ということがよく言われます。あるいは「ごみ問題を職とする人はみな哲学者だ」ということも言われます。一般の人たちがそのような好意的な評価をしてくれることはありませんから、業界内の言葉です。たとえば、賞味期限が切れたため食べられることなく捨てられてしまったハムや豆腐や納豆等食品の数々。あるいは、まだ着ることができなのに捨てられてしまった衣類。私たちの不誠実なライフスタイルの残骸がそこにある、私たちの生活はこんなことでいいのだろうかという具合です。

私も若い頃から散々ごみの山を見て、手で触ってきました。ごみ対策を考える仕事をやってきて最も辛い仕事はごみのサンプリングでした。臭い、汚い、重い、危ない。なにしろ、200キロからあるごみの塊をハサミで切り刻みスコップでかき回し、最終的に10キロのサンプルを持ち帰るという作業です。そういう作業を続けると汗が出ます。汗が乾くとごみ特有のすえた臭いが皮膚に染みついて、なかなか取れません。そのような重労働をした結果、何らかの哲学が生まれたかという、はなはだ心もとありません。文学的な感性が身に付いたかという、これも自信がありません。しかし、いろいろなごみを眺めた記憶は今でも生々しく記憶に残っています。丸ごと捨てられた大根やキャベツを包丁の代わりにスコップでスコンスコンと切り刻むのは、結構気持ちのいい作業ではあるのですが、やはり「なんともはや、もったいないことだ」という屈託は残ります。ごみ袋にハサミを入れたとたん無数の米粒が床面にこぼれ落ちたことがあります。何ともったいないことをするのだろうと、よくよく目を凝らしてみれば真っ白なウジ虫が足下でうごめきこちらに向かっていっせいに行進を始めました。今ではそれほど大量のウジ虫がごみの中に含まれることはありません。紙やプラスチックが主体の現代のごみはウジ虫にとってすこぶる住みにくいようです。ウジ虫が元気に育ち、ハエとなって我々の居住環境を不衛生にしていたのは40年も以前の話です。学校の答案用紙もよく捨てられていました。不思議なことに、捨てられる答案は0点が多いのです。他人様に見せたくないものをごみ袋に入れるというのは人間の性（さが）というものでしょうか。捨てられている雑誌も、決して親には見せたくない類のものが多いのです。筵にくるまれた犬の死骸を目撃したこともあります。白い小型の犬でした。なんだかいやでしたねえ。使用済みの生理用品や紙おむつは日常的

に見られました。これもいやでした。

いやといえば、知っている焼却工場に、殺害してバラバラにした遺体のごみとして遺棄されたという事件もありました。あれは袋収集になったからできたことなのでしょう。木製のごみ箱やポリ容器に排出するという50年前のシステムではそのような事件は成立しなかったでしょう。袋収集は人に見られたくないものを密かに処分するためには都合のいいシステムです。おそらく、収集方式が変わることによって捨てられるごみも変わってきたという面もあるのでしょう。

「ごみ質」という言葉は、業界人には馴染み深い言葉ですが、一般の人にはよく理解できない言葉です。ごみは人の生活の残渣物ですから、「ごみ質」は人間生活のバロメーターということになるかもしれませんが、食べ物のカロリーは気にしても、ごみのカロリーを考える人はいません。「今日出したごみは高カロリーだったわねえ」と井戸端会議の話題になったという噂は聞きません。ごみの水分は約50%だと言ってもピンと来る人もいません。赤ちゃんの水分は70%だけれど年を取ると50%近くになるという記事³を見た後で、スポーツクラブで計ってもらったその結果が52%であったというショック。そういえば、この職に就いた時のごみの水分は60%だったから、その時を起点として、自分の体の水分とごみの水分は同じ速度で乾いてきているのだなあ・・・という埒もない感慨を持つことも、ごみ問題を考える一つの楽しみなのかもしれません。

3. 様々な「もはや戦後ではない」

昭和31(1956)年7月に発表された経済白書で「もはや『戦後』ではない」と記述⁴され、

³ http://mizu-hikaku.com/trivia_necessity.htm

⁴ 半藤一利(昭和史 戦後篇)によると、これを執筆したのは経済企画庁調査課長の後藤誉之助氏であるという。

一般的にはそれがその後続く高度経済成長の幕開けを象徴する出来事とされてきました。しかし、実際のところ、それは必ずしもそのような意図で語れたものではないようです。経済白書の要旨は以下のようなことです。

戦後日本経済の回復の速やかさは国民の勤勉な努力や世界情勢の好都合な発展によって育まれたものであるが、敗戦によって落ち込んだ谷が深かったことによって、その谷からはい上がるスピードが速やかという面があることを忘れてはならない。もはや「戦後」ではない。回復を通じての成長は終わった。今後の成長は近代化によって支えられる。進みゆく世界の技術に自らを適応させなければ、先進国にますます差を付けられるばかりではなく、後進国との間の開きも狭められるだろう。

今後の経済成長を予言するどころか、今までの成長は戦後復興という条件下にあったためであり、戦後 10 年を経た今は近代化を進めることでなければじり貧になるであろうという、いわば叱咤激励するものでした。

経済白書が出される半年ほど前に、文藝春秋紙上に中野好夫氏が「もはや『戦後』ではない」との論文⁵を公表しています。「奮い夢よ、さらば」というサブタイトルが付されたこの論文は、戦後十年が過ぎたので、「戦後」意識から脱け出して、未来への見通しに腰を据えるべき時として、①国と国の関係を考える上で、宿怨とか報復とかいった感情的な考え方に押し流されない関係の構築が必要であり、日ソ関係、日韓関係を見直すべきであること、②新しい時代は若い世代にチャンスを与えるべきであること、③一等國、大國という侵略的軍事力を背景としたかつての帝國の夢、米英と肩を並べた者の夢をもう一度ということは放棄するべきであり、小國としての

⁵ 中野好夫：もはや「戦後」ではない、文藝春秋、1956.2、pp56-66

新しい意味を認め、それを人間の幸福に向かって生かす新しい理想をつかむべきであること、という趣旨から構成されています。

同年の厚生白書でも、「もはや『戦後』ではない」というのが最近の一つの流行語になっている」と前置きした上で、「果たして「戦後」は終わったのかどうか、国民生活の面から考えてみる」として、①国民一人当たりの国民所得は、ようやく昭和 14 年の水準に達したに過ぎないこと、②「エンゲル係数」は戦前の水準に達していないこと、③一般犯罪の増加、不良化した青少年の数の増加、自殺率、赤線・青線地域の氾濫など生活のゆがみを思わせる現象もあることなどを指摘しています。

このように、それぞれの立場で「もはや『戦後』ではない」ということが語られていますが、その後の捉え方は、高度成長という明るい未来を目の前にした象徴的な言葉として引用されることが多いようで、たとえば平成 5 年度の環境白書では、以下のように記述されています。

昭和 30⁴年の経済白書においては「もはや戦後は終わった」と表現され、我が国の生産水準は戦前を超え、30 年代に高度成長へ向かうことになった。

*昭和 30 年は 31 年のミスであると思われる。

このような後付けの理由が不自然ではなく聞こえるのも、その後の高度経済成長がすさまじいものであったからでしょう。

4. The Waste Makers

昭和 36(1961)年 10 月にヴァンス・バックカードの「浪費をつくり出す人々⁶」の翻訳版が出版されました。原文は、The Waste Makers です。本書は後で述べるように、悪名高い「電通 PR センター戦略十訓」の元になったもの

⁶ V・バックカード：浪費をつくり出す人々、ダイヤモンド社、昭和 36 年 10 月 27 日

だそうですが、実は本書は「ごみを作り出す人」を賞賛したものではありません。逆に高度成長戦略を批判することを目的に書かれたものです。その冒頭では、「彼ら（アメリカ国民）は、もっとも個人としての消費を高めるように要求され、しむけられなければならない。それは、彼らが商品にたいして差し迫った要求をもっているかどうかには関係ない。日に日に拡大する経済が、それを要求するのである」とシニカルな表現で状況を解析し、さらに「必要とされるのは、多数のアメリカ人を、貪欲でむだ使いする、衝動的な消費者にしてしまうという戦略である」と前置きし、9つの具体的な戦略をあげています。

そして、この泥沼状態から抜け出すための道として、たとえば「慎重の美德」あるいは「質の美德」さらには「バランスのある社会」というタイトルの章が綴られています。そして、本書の最後の章には「健康な生活」と題し、以下のような魅力的なキャプションを付しています。

「アメリカは幸せがありあまっているという病気を病んでいるのです」——テキサス州ウイチタ・フォールで美しい白髪の女性がなにげなくのべたことば、このことばだけを憶え、女性の名まえは失念した。

昭和 36(1961)年に発表されたこの書を参考にして、わが国がどのような戦略を講じたかという、これはもう、とんでもないというしかない大胆さでした。

「浪費をつくり出す人びと」の翻訳者の一人である石川弘義氏の著書⁷によると、これを参考にして日本のオピニオン・リーダーのひとり、日本版「浪費を刺激する十の戦略」を作り上げ、さらに、ご存じ「電通 PR センター戦略十訓」（「図表で読み解く ごみは文化のバロメーター」p11）では、「もっと使わせろ」、「もっと捨てさせろ」、「無駄遣いさせ

ろ」という、皮肉にも、その後のわが国を、誇らしくも裕福な国に変える原動力になったこの思想を産むことになりました。

救いといえば救いになるのですが、わが国でもこのような流れに批判する意見はあったようです。昭和 45(1970)年の小説新潮で山本夏彦氏は以下のように述べています⁸。

電通は博報堂と並ぶ広告の代理店で、テレビの出現以来、博報堂を引き離して日本一となった。この社のもと社長は、広告の鬼といわれた男で、「電通十則」を残した。いわく、「もっと使わせろ」「捨てさせろ」「ムダづかいさせろ」「季節を忘れさせろ」「贈りものをさせろ」「流行遅れにさせろ」（以下略）

いくら広告のブローカーでも、こんな野卑な標語をかかげ、社員を督励するばかりか、ひろく天下に自慢するとは、社会に対する公然たる挑戦である。

しかし、この時点ではすでにわが国の高度経済成長は終息に向かいつつありました。それから3年後の昭和 48(1973)年9月の朝日新聞には、「消費は美德ではない 一転、節約のススメ」との記事が載ることになりました⁹。このような目まぐるしく変わる社会情勢の中で、ごみの量や質は大きな影響を受けることになりましたし、後で述べるようにわが国の廃棄物処理の夜明けともなったのです。

5. 「ごみは文化のバロメーター」と言われる時代

⁸ 山本夏彦：社会望遠鏡、小説新潮、昭和 45 年 4 月号、pp61-62

⁹ 「産業問題研究会は近く、エネルギー、資源の不足時代に備えて、産業界と消費者に“節約運動”を呼びかけることになった。財界から動き出したこの種の運動では、昭和 26 年に行われた「新生活運動」に続くものだが、経済の高度成長期に「消費は美德」「新しい需要の創造」などのキャッチフレーズで消費の拡大を推進してきた経済界だけに、果たしてこの運動がすんなり受け入れられるかどうか」（朝日新聞、昭和 48 年 9 月 20 日）

⁷ 石川弘義：欲望の戦後史、アテネ新書、昭和 46 年

「ごみは文化のバロメーター」と言われた時代がありました。それは、ごみがたくさん出るのはわが国の消費水準が上がった証であり喜ばしいことであるという意味でした。今から4・50年前のことです。そして、今また「ごみは文化のバロメーター」と言われる時代がやってきました。意味はまったく異なります。

それを検証する前に、文化という言葉をもう少し深く探ってみましょう。文明と文化はどう違うのか。広辞苑では、「人間の精神的生生活にかかわるものを文化とよび、技術的發展のニュアンスが強いものを文明とよぶ」と定義しています。

加藤三郎氏はその著書¹⁰の中で、文明と文化という言葉について、辞書や専門の解説書によって様々に異なった説明がなされていると断ったうえで、以下のように定義しています。

【文明】ある時代や地域に関し、その政治、経済、社会、文化など一切を包含した社会のあり様そのものをいう。

【文化】学問、芸術、宗教、道徳など、主として精神活動から生み出されたものを指す。

司馬遼太郎は、その著書¹¹の中で、次のように述べています。

文明とは「たれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの」をさすのに対し、文化はむしろ不条理なものであり、特定の集団（たとえば民族）においてのみ適用する特殊なもので、他に及ぼしがたい。つまりは普遍的でない。

だんだんイメージが固まってきました。もっと分かりやすい言葉¹²があります。

¹⁰ 加藤三郎：環境と文明の明日、プレジデント社、1996

¹¹ 司馬遼太郎：アメリカ素描、新潮文庫、P18

¹² <http://okulo.jugem.jp/?eid=40>

文明とは集団の枠を超えて人類のために使われる技術や智恵であり、文化とは民族や集団がそれぞれの独自性を出すための手段である。

最後に、類義語使い分け辞典¹³というのを見てみましょう。

【文明】整然とまとまりのある組織を作り上げている社会の状態。

【文化】その社会を構成する人々に共通してみられる行動の様式。

要するに、「文明発祥の地メソポタミア」というように「未開状態」と対比する言葉が文明であり、その発展型が「物質文明」「文明の利器」「機械文明」という技術水準が高度に向上した状態を表す。一方、「文化」は、「日本古来の木と紙の文化、食文化、若者文化、異文化との出会い」というように、物心両面にわたる共通した価値観・物の見方、学習された行動のパターンなどを表し、さらに学問・芸術・宗教・教育・出版といった知恵や知識を伝達する活動を指す場合もある。「現代文明」は「文化」と置き換わらないし、「日本現代文化」は「文明」には置き換わらない。

これらを重ね合わせれば、ある程度イメージは固まってきます。それで、廃棄物問題として考えてみると、

<物の製造は「文明」の所業であり、その消費の結果発生する廃棄物の処理は「文化」に従わなければならない>

多少の誇張といくつかの例外があることはお許しいただくとして、そのように捉えた方が、現代のごみ問題を考えやすいような気がします。流通が発達していない時代は、文明は一部の地域に偏在したものであったのでしょうが、現在は普及の程度は違うものの、どの国でも享受できる普遍的なものになりま

¹³ 類義語 使い分け辞典、研究社出版

した。しかし、その文明を消費して出てくる廃棄物は普遍的なものではありません。地域固有の生活スタイル、たとえば様々な消費スタイルや食生活というフィルターを経てくるからです¹⁴。

かつて、わが国は、大量に排出されるごみを効率的に衛生的に処理するために、ごみ焼却施設という高度な文明を開発し、さらにそれをより究極的なレベルまで高めようというスターダスト計画¹⁵にも着手しました。今から40年も前のことです。混合収集したごみを機械的に選別し、機械的に資源化するという力業です。このスターダスト計画が挫折した時をもって、ごみ処理は文明の利器に頼る時代から、地域固有の文化に従う時代に移行したと言っているのではないかと思います。

たとえば、「ごみを出さないとかリサイクルしましょう」というコンセプトを、日本固有の「もったいない」という言葉で色づけたのは文化と言っているでしょうし、日本固有の町内会というシステムの延長線上にあるような集積所における高度分別収集や集団回収を定着させたのも文化と言っているのではないかと思います。

今から10数年前にJICAの固形廃棄物専門家としてインドネシアで2年間仕事をしました。私の役割は技術移転ということでした。はじめ<移転>という言葉には違和感がありました。技術と移転という言葉がうまく繋がらなかったのです。移転とは、物を移しかえること、手っ取り早く言えば引っ越しです。技術の引っ越しとはいったい何だろう。よく理解できないまま、結局は私の持っているもの

の、知識とか経験とか判断力とか、ささやかではあるけれど、そういったものを根こそぎ引き渡すということなのだろうと思いました。しかし、結局、2年間で効果的な移転ができたかという点で残念ながらそうではありませんでした。たとえばごみ焼却技術を伝えようにも肝心のごみ焼却施設がないし、建設される予定もありません。リサイクルの知識を移転しようにも、リサイクルはすべて人手に頼っているから、機械化すれば彼らの職を奪うことになります。市民に対してごみキャンペーンを行ったにしても、日々の食いつ持に汲々としている人々が関心を示すとは思われません。ごみを収集する方法を考えるにしても、肝心の収集車の絶対数が不足しています。

考えてみれば、私は、日本の最新文明を丸ごと移転しようとして失敗したということなのでしょう。ごみ処理の基本が地域固有の文化にあるということを理解しなかったということだと思います。

そう考えると技術移転という言葉自体も死語となすべき言葉なのでしょう。文化の移転ということはありませんから、これから私たちが取り組もうとしている国際協力に際しても、「文化」というキーワードを抜きにしては十分に成就することは出来ないと思うのです。



インドネシアの埋立地で資源を集める子供達。彼らの表情が底抜けに明るいのが最初のカルチャーショックだった。

¹⁴ (財)日本環境衛生センターのHP、「図表で読み解くニッポンのゴミ」に紙の消費傾向や食生活に関する若干のデータを掲載しました。

¹⁵ スターダスト計画：昭和48(1973)年に旧通商産業省工業技術院の主導で実施されたプロジェクトで、混合ごみを機械的に選別した後に、熱分解ガス化方式などによって燃料ガスなどのエネルギーを再生するというものであったが、結局は実用化されることはなかった。